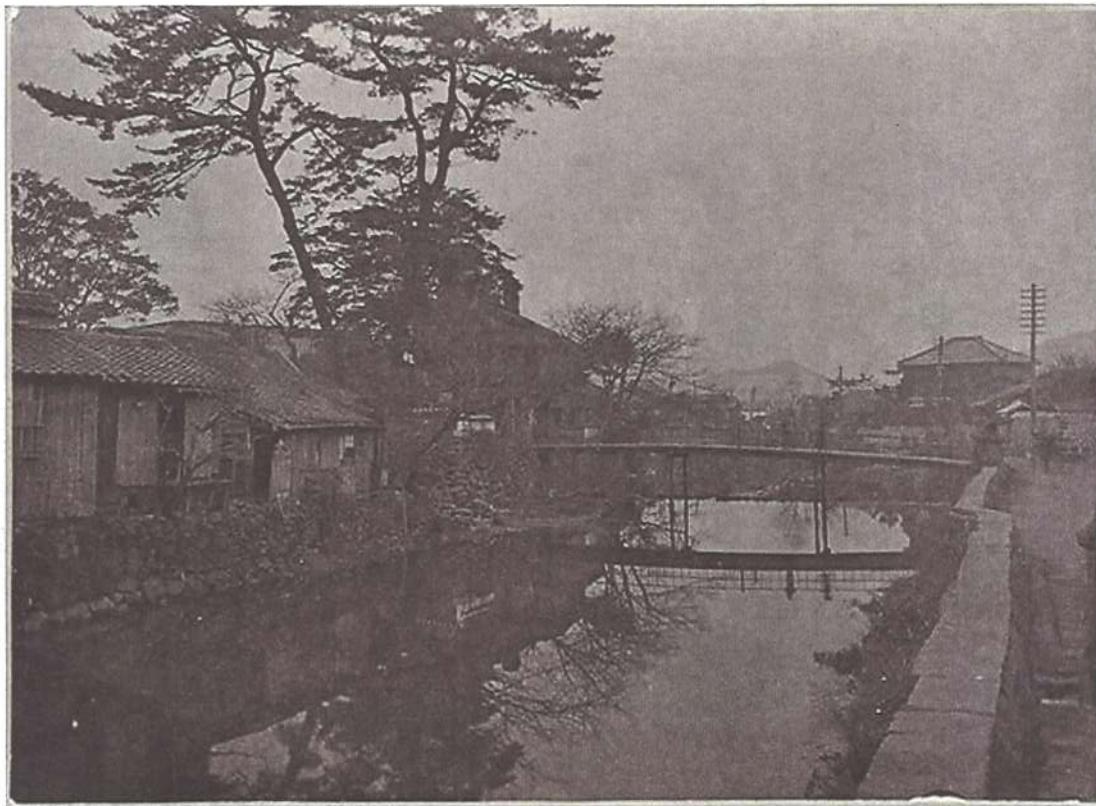


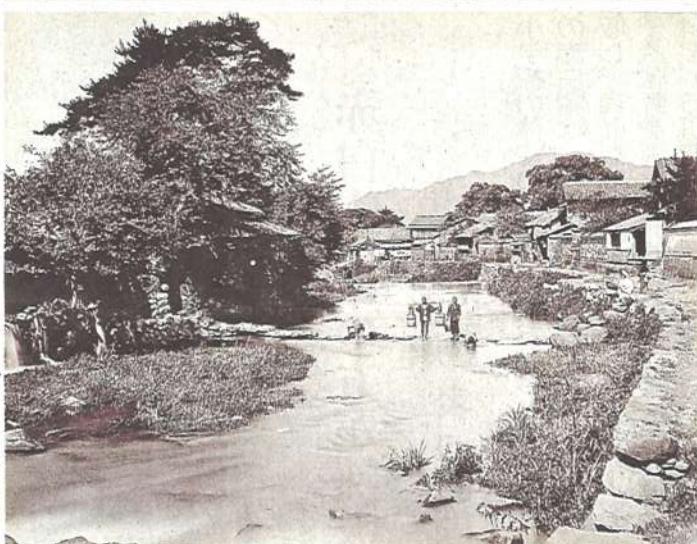
# 彦馬ゆかりの絶景ポイント



①明治30年代の銭屋川（竹下佳行撮影、長崎外國語大所蔵）



②元治元（1864）年の銭屋川（フェリックス・ベアト撮影、長崎大附属図書館所蔵）



③明治7（1874）年の銭屋川（上野彦馬撮影、長崎大附属図書館所蔵）

## 銭屋川

写真①は、明治30年代に撮影された銭屋川（中島川上流）の上野彦馬邸付近である。川の名前は江戸初期にあつた鎌

錢所に由来する。右に少し写る水道栓が彦馬の写真館の場所。「日本写真の開祖」とい

いな」の地で、文久2（1862）年に「上野撮影局」を開業した。

写真機が伝來した幕末、「写真に撮られる魂を吸い取り

われる彦馬は、父俊之丞が硝石精錬所を經營した水がきれ

明治時代にはビードロ（ガラス）の家」と呼ばれた豪華なスタジオが建ち、繁盛した彦馬の屋敷の外壁は十坪から

武家風の白塗に塗り替えられていた。

川幅が広がる絶景ポイントであり、幕末に彦馬スタジオを訪問したベアトが撮影した写真②や、彦馬自身が撮影した写真③など、建物と景観の変化が分かる写真が残されている。

写真①の右側の堤防は明治30年ごろ築かれた。30年代に然の川であった銭屋川である。

左側の木造の家屋は川そばが台所のようで、木の洗面盤が干され、水ための木桶が外に置かれている。屋内からは手作りの板縁が涼みどころとして張り出している。

この企画の過去の記事、写真は長崎外國語大のホームページ（<http://www.nagasaki-gaigo.ae.jp/recnas/newsapaper/>）で見るといふがどうぞ。

写真に見る  
115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□ 28 □

れる、早死する」といった迷信のため、庶民はカメラの前に立つことを恐れたが、やがてあるがままを写す写真に興味を示すようになった。また

長崎を訪問する諸藩の武士や志士、来航した外国人らが頻繁に彦馬の写真館を訪れた。彦馬は、父俊之丞が硝石精錬所を經營した水がきれ

明治時代にはビードロ（ガラス）の家」と呼ばれた豪華なスタジオが建ち、繁盛した彦馬の屋敷の外壁は十坪から武家風の白塗に塗り替えられていた。

は屋敷前に井堰が造られ、貯水されていた様子が分かる。

防火および取水のためであろ

うか。

また右の岸辺に立つ石灯籠の横には、明治26（1893）年に設立された長崎電灯株式会社が配置した電柱と電線も確認できる。対岸に架かる鉄製の紅葉橋は、彦馬が愛人のかのじを渡して、人の名前を付けたといわれている。

この企画の過去の記事、写真は長崎外國語大のホームページ（<http://www.nagasaki-gaigo.ae.jp/recnas/newsapaper/>）で見るといふがどうぞ。

随時掲載します



長崎外國語大の  
ホームページに  
アクセスできる  
QRコード